

【教養教育科目】

1	インターフェイス科目「食と健康Ⅲ」では、講義内容を理解しやすいようにするために実際に測定を行ったり、身近な例で説明するなどの工夫をした。
2	インターフェイス科目「食と健康」（教養講座）「くすりの話」では、1年生の段階から医学の専門的な知見にふれさせ、興味を掻き立てるようにしている。薬剤耐性アクションプランの様にグローバルで取り組んでいるトピックを取り入れ、医師、看護師に関わらず広い視野で抗菌薬適正使用を考える人材を育成している。
3	教養教育科目として基本教養科目を一部刷新した。
4	「医療人キャリアデザイン」では医学部のみならず本庄の学生の受講者も引き受けており、彼らにも積極的に非医療従事者側からの視点での意見を述べさせている

【専門教育科目・講義・演習】

1	講義プリントの改訂、PCによる動画の採用、スライドと板書の併用、講義の小レポートの提出
2	講義項目を確認し必要性を評価して、従来の項目の削除と新しい項目の採用を行っている。講義で学生に説明をする際に具体例を活用しており、その具体例についても検討し新しいものを取り入れている。
3	講義は最新の知見も加えた。
4	板書の書き方に工夫をこらしてわかりやすいとの高い評価を得た。
5	教員と学生との双方向性の講義を意識し、適宜、質問を投げかけ自ら考えさせることを心掛けた。
6	講義後に行ったアンケート結果を活用し、シラバスの改良を行った。
7	本試験の採点結果を寸評の形で学生に公開した。
8	免疫学の講義は、教科書を指定し、しっかり学習できるように指導したほか、スライド等は新規に作成した。配付資料をさらに改善し、見やすいものにした。PBL(U7)の講義に関して、常に最先端の情報を提供すべく、スライドや配付資料の更新を行っている。
9	講義に関しては、昨年質問が多かった点を改善したスライドを作成した。
10	授業評価アンケートや個別のコメント等を参考にし講義内容や進行度などを調整している。
11	前年度の試験結果やアンケートの結果を基に、講義内容や資料内容の見直しを行った。
12	H29年度研究室配属プログラムでは、研究手法以外にも試薬や機器の取り扱いにおいて事故を起こさないための細かな注意点についても指導を行った。
13	スライド・配布資料の内容を整理し、要点の設け方に工夫を施した。
14	形態学のあり方、その意義を、顕微鏡技術の進歩との兼ね合いを織り交ぜながら、学生に伝えた。
15	組織学では、講義の補足となるプリントを配布し、重要項目の理解を促した。
16	発生学では、自作の模型を使用して講義を行い、人体形成の3次元・4次元動的ダイナミクスを理解を促し、質問にもできるだけ対応した。
17	学生の自己学習能力アップのために小テスト問題の難易度を上げ、即日採点・即日結果発表することで迅速なフィードバックを心がけた。
18	臨床医を非常勤講師として招聘することで、学生に基礎医学から臨床医学への接続を意識させた。
19	講義では、担当教員が一方的にしゃべるだけでなく、学生への質疑応答を講義中に心がけた。
20	解剖学では学生に対し、適宜、口頭試問をし、理解度を把握しながら指導をしている。
21	講義を実施するにあたり、図を多用した授業プリントを作成し、学生が分かりやすいように心掛けた。
22	前年と同じ内容ではなく、新しい情報を加えるなどして講義内容を常に改善するように努力した。
23	講義中にCCD装置を用いて図を多く表示し、より分かりやすい講義を行なうように心掛けた。
24	わかりやすい講義にするため、毎回の講義の目的(SBO)と内容の関連性を明確に示し、丁寧に説明した。
25	学生の興味をひきだすため、講義内容に関連する臨床例を折り込んで、より具体的な理解を得られるようにした。
26	高い講義品質を維持するため、講義アンケートを毎回おこない、その結果を次回の講義に即時にフィードバックした。
27	自己学習を促進するため、講義資料は大きくカラー印刷し、専用のウェブページ(学内限定)でPDFファイルを配布した。
28	学生の理解をふかめるため、学生からの質問には十分な時間を割いて、マンツーマンで丁寧に回答した。
29	本試験および再試験前の質問に対しては、1回に30分以上の時間をとり、質問内容に加えて、本人の弱点と勉強方法を具体的に指導した。
30	薬理学講義において、疾患部位における解剖学的構造および生理学的機能を説明した後に、病態下における機能変化および薬物の薬理作用を解説した。
31	各单元ごとに例題を出して学生に考えさせ、薬理学的思考のトレーニングを行った。
32	各单元終了時に中間試験を3回おこなった。これらの試験では暗記項目はCBT試験に準じた必要最小限の項目のみにして、薬理学的思考力およびデータ分析力を養うための問題を出題した。

33	講義では、要点をわかりやすく解説すると共に学生が参加できる授業展開を心掛けた。
34	毎回 講義内容をまとめたプリント（シラバス）を準備し、学生に配布した。
35	講義内容をさらに分かりやすく説明するために、スライドを作成し講義を行った。
36	今年度より、病理学総論の講義では、講義の後で小テストを行うようにして、最終評価に反映させた。
37	病理学総論の初めに、序論として病理学の位置づけ、勉強のやり方などについて概説した。
38	医学科選択コースでは、学生の特徴に合わせてテーマを決めて病理学知識の獲得を目指した
39	講義や実習では、シラバスを配布し、理解の助けを改善した。また、学生の質問には、時間外でも積極的に対応した。
40	医学科学生への講義では、病理学の用語、定義、概念を理解できるように、講義内容を吟味し、実際の講義を行った。
41	看護科学生への講義では、図を多用して病理学の理解を助けた。
42	看護科の講義では、病理学の概念、疾患の定義を日常診療や看護と関連づけ、興味を持ちやすいように内容に配慮した。
43	実際の写真や図を多く用い、印象に残るようなスライド作製を行った。
44	医学科の講義資料を改善した
45	看護学科の講義資料を改善した
46	分子細胞生物学、微生物学 講義用プリント及びスライドを学生の意見を参考に一部作り変えた。
47	講義内容および配布資料は、すべて毎年アップデートしている。
48	保健統計の講義では、最新の統計や法律に基づく内容を話す必要があるので、すべて更新した。
49	看護科の疫学Ⅱでは、グループワークによる研究計画作成とその発表を行った。
50	公衆衛生分野として初めて総括講義が加わることになり、問題作成と解説を行った。
51	社会医学実習と医学科選択コースでは、学生に頻繁に声をかけたり質問したりして自身で考えることを促した。
52	講義内容を基礎とした実際の問題解決力になる知識の習得のためにワールドカフェ方式、ワークショップなどによるディスカッションなどを用いた講義、実習内容に工夫した（医療入門Ⅱ）
53	講義のねらいや教えたことを解説し、学生の興味を促した
54	講義では学生の興味を引き出すよう考え、板書の見易さに配慮したほか画像提示も行い、わかりやすい説明を心がけた。
55	臨床医を目指す学生が多い中、法医学に興味をもたせるよう、実際に起きた事例もまじえて講義した。
56	画像教材で、大規模災害や虐待事例について講義を行った。
57	英語については、新しいテキストの開拓が十分にできた。
58	文学についても、新しい分野のテキスト開拓が存分にできた。
59	学生ラウンドを講義と組み合わせで行った。免疫学の講義も組み合わせた。
60	学生用講義プリントを充実させ、自己学習を行い自分で理解し発展学習ができるように工夫した。
61	膠原病の画像診断・エコーのシラバスを改訂整備しなおした。
62	講義スライドは毎年最新の情報を踏まえて改訂している。
63	臨床入門呼吸器診察法は、呼吸器診察を通して何を把握したいのかをイメージできるように、構成を試みた。
64	ユニット3呼吸器系講義では、国家試験を想定したポイントを重視した内容にした。
65	写真スライドや動画を用いた解説を行った。
66	現場に必要な知識を中心に興味を持てるように配慮した。
67	アイスブレイキングとして講義前にテーマを設定した自己紹介を行う
68	講義用スライドは文章よりも図を重視
69	3つの学部講義に関しては講義用のPowerPointファイル、配布資料を作成し、最新の国家試験の内容を盛り込んだり、ビデオ映像を取り込んだり、学生に興味を持ってもらうべく工夫を行った。
70	講義のプリントをアップデートした。
71	能動的な学習
72	シラバスの工夫、講義スライドにイラストや写真を多く取り入れ視覚的な学習を増やすようにした。
73	講義では学生が興味をもてるようなスライド作成を心がけた。
74	系統講義においては、心エコーの各疾患毎の実際の動画を引用するなどして、学生の興味・理解度の向上に努めた。
75	肺循環の講義において、これまでの肺塞栓症主体のものから、より実臨床に則した肺高血圧症全般についての講義に変更した。
76	講義ではメリハリをつけるため、ただ聴講するだけに終わらないよう、重要箇所を強調するよう配慮した。
77	病棟での講義は、少人数の良さを生かして、その場で理解し習得できるような工夫をした。
78	講義では、単なる疾患の羅列・説明といったなじみのない疾患では理解困難な状況に陥らぬよう、具体例を挙げ、また実際の診療現場で重要となる事項を中心に説明し、理解の一助になるよう取り組んだ。

79	講義・シラバスに簡単な設問を用意し、単調な進行にならないよう取り組んだ。
80	シラバスや内容は毎年改訂に心がけている。
81	尿沈渣講義では実際の臨床に即すように可能なかぎり学生担当患者の検体を選定し指導した。また補完のためにもスライドの作成を行い、併せて学生に指導した。
82	最新の医療情報を取り込んだ教材の作成
83	理解しやすいように画像や動画を多く取り入れて授業を行い、シラバスも作成した。
84	授業時には視覚的にわかりやすいようなスライド作りを心掛けた。
85	復習・授業のポイントがわかりやすいように、授業の最後に〇×式のミニテストを行った。
86	講義は一限目に具体的な到達目標を説明し、講義を行うことで学生に学習目標を明確にした。
87	講義中に症例を呈示し知識を繋がるように説明した。
88	最先端のエビデンスに基づいた診断学、治療学についても説明した。
89	過去の講義の感想で、「速度が速い」との意見があったため、講義では学生の反応を見ながらゆっくり話すことを特に心がけた。
90	肝疾患の症候学、肝臓について臨床に重点を置いた講義を心掛けた。
91	講義ではわかりやすいスライド作成を心がけた。
92	看護科一年生の講義満足度向上を狙う。具体的には医療経験が少ない看護科一年生の講義では家族や友人の病期のエピソードから導入し、実際の臨床現場を想起させ、専門性のある講義へつなげる。また医療ドラマや漫画を題材とし、少ない医療にかかわる経験を補完することで、より実践的な教育を行う導入部とする。
93	講義スライドを改訂して、学生の興味を引くように努力した。
94	学生講義では、スライドに臨床写真を多く取り入れ、イメージしやすくかつ臨床に役立つような工夫をした。
95	講義の中で、実際の臨床現場で起きる事例を挙げながら話をし、学生が興味を持てるよう工夫した。
96	授業内容で用いるスライドに、写真やシェーマなどの画像をたくさん取り入れることにより、わかりやすく学生の理解を含める方針とした。
97	学習意欲を高めるため、講義内容で扱う疾患をもつ患者が、現実的にどういうことで悩んでいるか、またその治療を行うにあたり、本人や家族の環境にどういう変化が出るかなど具体例を説明した。
98	ユニット7講義では、臨床写真や病理組織像を多数用いて視覚的にも学びが深まるように工夫した。
99	講義においては皮膚科特有の手術器具や手術のポイントなどに重点を置き解説した。
100	わかりやすくシラバスを改善
101	講義では、スライドにアニメーションを使用したり実際の臨床写真を載せたりして興味を引くよう工夫した。
102	より学生が興味をひくように、講義内容を写真や画像が多くなるように工夫した。
103	循環管理の基本が理解できていなかったため、新たに循環管理の講義を開始した。
104	腹部末梢動脈シラバス 図の追加、変更
105	国家試験に出題されることが想定される内容を重点的に指導。
106	学生の学ぶ意識を聞きだし、適切な情報提供を行う。
107	3年生講義が増え、スライドを作成、校正を行った。
108	スライド内に手術動画を入れることで、講義内容に理解をしやすくした。
109	適宜、質問することや、質問を受けることで、理解を深めた。
110	学生にも身近に感じてもらえるように具体例などを提示するように努めた。
111	心臓血管外科学にできるだけ興味を持ってもらうように、専門用語をかみ砕いて説明するように意識した。
112	ビデオ供覧
113	総合ディスカッション
114	講義において動画や写真を多く用いて、視覚的にわかりやすいように工夫した。
115	講義・実習指導においては、基本的に実臨床に基づくデータを供覧しながら興味を持たせる様に工夫した。
116	顕微鏡下の切離、縫合操作を基本としているが、人工血管等さまざまな材料を用い、実際の手術に近い環境を実現しより興味をもって取り組めるように工夫している。
117	スライドのシラバスを用意する
118	質問をしながら考えさせる
119	臨床の症例から生理、解剖学など基礎の分野も考えさせるように努める
120	講義においては学生が興味を持ちやすいような説明をゆっくりと語りかけるように話すように努めた。
121	画像を多用することでビジュアル世代といわれる学生に対応した。
122	動画を部分的に使用することで興味を持続しやすいようにした
123	基本的な話から最先端の話までを内容にすることで未来への展望を描きやすい内容にするように努めた。
124	講義スライドの改良

125	講義では、学生にわかりやすいようなスライドや単語を使用するように心掛けた。
126	常に病態生理を考えるよう指導している
127	講義では、大きな声ではっきりと発言するよう心掛けた。
128	講義内容・シラバスの見直し
129	講義スライドには写真、イラスト、動画を使用し興味を引くように努めた。
130	ゆっくり大きな声で発言するようにした。
131	講義においてはPowerPointを用いて教材作成をしているが、授業終了後には作成した講義内容すべてを公開
132	講義や実習の評価を随時学生からモニターし、その結果を適宜指導内容に反映させた。
133	講義内容向上のため、知識習得に日々努めている。
134	講義では、実際の精神医療の現場だけでなく他の領域の医療現場や個々の日常生活でも役立つ内容になるように配慮して、精神療法や心理検査の具体的な方法論や技術だけでなく、ものの見方を伝えるように工夫した。
135	講義では、説明内容がスムーズにいくように、導入部分を分かり易く構成し、資料の作成、配布を行い、スライドを併用した。
136	学生に対し知識だけの授業ならなよう注意し、魅力のある講義に取り組んでいる。
137	講義では学生が興味を持てるように実際の症例や画像、動画を多く取り入れるよう心がけた。
138	最新のガイドラインに準じたシラバスに更新した。
139	ユニット5の授業時間を増やし、小児腎泌尿器の症候学を追加した。
140	講義の資料・スライドにの内容を最新の知見を入れるように随時改定した。
141	できるだけ実症例のデータを盛り込み、臨床に即した教育内容になるように努めた。
142	講義はスライドで要点をまとめて視覚的にも理解しやすい様に心がけた
143	講義は要点をなるべく絞しつつ、最新のエビデンスや臨床に基づいた内容を講義するようにしている。
144	医師国家試験の出題範囲に相当する領域には漏れがないように講義している。
145	解剖学的な位置関係などをわかりやすいように動画、写真、イラストなどを利用した
146	実際の患者さんの実例を示し、患者さんの協力を得ながら、教科書の深い理解ができるように留意した。
147	臨床的にも専門的な内容のためできるだけ興味を持てるような内容にするよう工夫している
148	臨床解剖学、疾患概念にそった手術法の説明
149	国試で問われやすい要点についての解説
150	学生に質問を行い、知識が定着するように努めた
151	以前の授業内容の確認を行うことで理解度を確認し、重要項目は振り返りを行った
152	学生の興味のある診療科と産婦人科学という観点で疾患を見つめるよう努めた
153	国家試験臨床問題の解説
154	講義は一般的な内容も取り込み、学生にもイメージしやすい内容を重視した。
155	国家試験の過去問を調査し国家試験合格を意識した内容を講義に取り入れた。
156	講義は医師国家試験の出題範囲に沿って、実際の症例写真を提示しながら授業を行った。
157	講義ではスライドの内容だけでなく実際の症例や動画を交えたり、診察をお互いに実際に実践したりすることで実臨床への応用や理解が深まるように努めた。
158	講義はできるだけ学生に興味を引いてもらうために、文字を極力減らして、インパクトのある症例写真を中心にスライドを作成した。またいかに医科と歯科（特に口腔外科疾患）が密接に関わっているのかを強調して講義を行った。
159	講義スライドを資料配布し、学習効果を高めた。
160	講義においては理解しやすいようにカラーのシラバスにした
161	講義においてはグラフや図、写真を用いて興味をひくようにスライドを工夫した。
162	講義ではTAVIについてわかりやすく理解してもらうため動画を用いて説明を行った。
163	具体例を提示して、興味をひくよう工夫した
164	講義の際は写真や図を頻用し、印象付けるよう心掛けた。
165	講義においては、前年度までのスライドを改良し、図を多く用いたスライドを作成した。
166	授業評価に基づき、興味がわくよう講義用スライド内容の見直しを行った。
167	取り付きの悪い核医学診療に関して、わかりやすい講義を心掛けた。
168	シラバスに工夫をこらした。
169	放射線科としてできるだけ多くの画像を紹介しようと講義のスライドに盛り込んだ
170	授業評価に基づき、わかりやすいよう講義用スライド内容の見直しを行った
171	講義においては、解剖学的事項の復習や正常像の理解を深めることに重点を置くため、CT画像を用いた3D立体画像を使ったわかりやすい説明をするよう工夫した。
172	実際の画像を読影して所見を取ってみる試みを3年生の授業に導入した。
173	講義については、図解したシラバスを使用
174	問題解決型の講義・実習を加える
175	臨床講義では、本年もスライドの内容をUP TO DATEさせた。

176	臨床実習中での講義がなくなったことから、内容に臨床上の要点も盛り込んだ。
177	early exposureでは、プレホスピタルケアに重点を置いた、現場救急の重要性に焦点を当て、現場の声を聴いていただいた。
178	臨床事例を提示し、具体的な感染症疾患として印象に残るよう心掛けている。
179	実臨床に準じた問題解決・感染症診断のアプローチを提示している。
180	臨床入門においては、最も重要視すべき手指衛生を中心に習熟を促す内容へ刷新を行っている。
181	3年次のユニット6では学生の段階から臨床判断が涵養できるように、実臨床の症例を交えて臨場感ある授業になる様に工夫した。
182	より操作が簡易な統計解析ソフトJMPを導入して教育を行った。
183	毎時間小テストを行って理解度確認を行った
184	今年度は、物理学の講義においてActive Learningの手法を取り入れた。具体的には、2017/3/2に本庄キャンパスで開催された講習会02「LTD話し合い学習法の基礎と活用」に参加し、学んだ手法の適用を試みた。
185	講義や実習では、教科書以外にも講義資料や新たな機器を準備した。講義の流れを示して、実際の福祉機器を使って説明したり、動画での説明方法を行った。
186	講義では、アクティブラーニングの手法を取り入れ、講義内での測定の実施、学生の意見の発表機会の提供、外部講師の招聘と、学生との意見交換を行っている
187	長年の米国での研究・教育経験を活かし、症例や法律(HIPAAなど)、最近の研究事例を活発に議論する機会を講義中に設け、学生の学習意欲・考える力を高めるよう工夫を行った。
188	医療倫理・プロフェッショナリズムの講義では、実際の事件や訴訟、症例を挙げ、どの時点のエラーが訴訟や患者さんの死に繋がったのか熟考・発言させるようにした。
189	画像やビデオなどメディアを用いて、より実体験に近い講義になるよう工夫した。
190	看護学科 人体の構造と機能(解剖学・生理学)では、学生に配布する講義資料の改訂を行った。
191	自己学習の補助とすべく、国家試験過去問集を配布した。
192	本試験前に希望者を対象に補講を行い高評を得た。
193	医学科 組織学、分子細胞生物学Ⅱでは、講義およびホームページ掲載資料の改訂を行った。
194	組織学および組織学実習では、学生に対して基礎に戻った説明を、ときにはマンツーマンでおこなった。これにより、学生の理解度も高まり、学生による授業評価で高い評価を得た。
195	病理学の演習課題を看護に結びつけてアクティブラーニングできるように工夫した
196	講義内容の見直しを行い、看護実践能力の育成に繋がるよう、フィードバックを充実させた。
197	演習についても、より教員の指導が充実するように演習方法を見直した。
198	演習時の必要物品についても拡充を図り、学生の評価も良好で、看護実践能力の向上に役立った。
199	演習のレポートは、評価BCの者はAレベルに至るまで繰り返し指導し、学生の能力の向上に繋げた。
200	ルーブリック評価を導入するとともにアクティブラーニングを積極的に取り入れた。
201	担当科目の教科主任として、講座内教員の調整や提出物の管理、評価資料作成、学習要項作成を行った。担当した講義・演習では、主体的学習を喚起するような教育方法の工夫をした。
202	講義科目において、前年度の学生授業評価、出席票に書かれた感想、および授業メモを振り返り、学生が理解しにくかった点や改善すべき点について教育内容を精選し、学生の理解が深まるように説明内容や教材を工夫した。
203	複数教員が関わる演習科目において、事前打ち合わせ、技術のデモンストレーション練習を行い、教育内容の教員間の統一を図った。また、演習後には担当者間で実施状況の確認と次年度に向けての改善点を検討した。
204	講義においては、昨年度の学習内容に追加内容が加わったため、新たな講義内容の構築を行った。
205	昨年の課題を踏まえ講義内容を追加、修正を行い、新たに参考書を追加して講義内容の充実を図った。
206	昨年度の演習の課題も踏まえて、演習につながる講義を模索し講義を組み立てた。
207	演習においては、講義の内容が連動できるよう、手順書のなかに認知のポイントを織り込み、学生に根拠も踏まえた援助技術の指導ができるようにした。
208	演習中に浮かび上がる疑問は、その都度担当教員と調整し、教員同士の指導が一致するよう心がけた。
209	技術チェックでは、技術のポイントを明らかにし、チェック後学生が課題が理解できるよう指導を行った。また必要時は、レポートに追加資料を添えて指導を行った。
210	講義・演習では、既習の内容や生活経験など身近な例などを用い、理解しやすいよう工夫した。
211	演習では、各学生の役割や課題を明確にし主体性が育つよう関わった。
212	役割を交代しながら繰り返し行う看護技術の演習では、学生間で再考する時間を取り、学生の創造性を引き出すことを心掛けた。
213	講義については、重要なポイントをまとめた資料を印刷物として毎回学生に配布した。
214	精神看護をイメージできるようにスライドやDVDなどを活用し視覚的に学習効果を向上させることに努めた。

215	テキストのみの内容に偏らないように適宜、教材を活用し、また学生一人一人が考える力を伸ばしていけるように、演習では事例を用いて看護過程の展開に取り組み、より現実的にケアの場面をイメージできるように努めた。
216	精神看護援助論では、精神看護学実習で受け持ちやすいケースを考慮し事例を作成した。
217	知識の定着化を図るため、各授業項目が終了した後に関連問題を解かせ発表させている。その際に、看護職としての対応/考え方/法的根拠等も併せて教授している。また、授業中に学生自身に考えさせ発言させる時間を設けアクティブラーニングを意識して行っている。学生の授業評価コメント等から、この授業方法は好評をえていると考える。
218	主に、在宅看護に関する講義は、他分野領域の統合的な知識を要する。しかし、カリキュラム上、既習出来ない項目も止むを得ず生じる。そのため、シラバスおよび学生のヒアリングを活用し、授業内容が理解しやすいように工夫を行った。
219	また、1年生に講義を行う際には、学習目標とずれないような配慮を行いながら、他領域ではどのように学んだことが応用できるかを講義に交えた。
220	START式トリアージの教育を災害看護の講義に導入して、教育による介入研究の成果を紹介した。
221	授業アンケートに基づき、継続して学生のニーズに対応した講義内容を導入した。
222	臨床心理学の専門性を活かし、看護学や医学とは異なる視点からの臨床援助と教育を心がけた（例えば、緩和ケア医療に従事する専門職のメンタルヘルスや、患者－医療者関係におけるカウンセリング・マインドなど）。
223	アクティブラーニングを用いた教授法を講義の中に取り入れた。
224	2年次に対する講義においては、3年次の臨床実習で活用できる知識の教授に努め、実際に臨床で使用している物品を提示したり、実際の患者をイメージしやすいよう画像等の教材を活用した。
225	グループワーク・演習においては、学生同士のディスカッションが深まるよう関わり、学習目標の達成にむけて学生らが主体的に課題に取り組めるようなファシリテートを心掛けた。
226	各講義では、患者のアセスメントするための視点を考えられるように、グループワークの時間を可能な限り設け、発表を通して考え方を深められるようにした。
227	講義導入時に小テストを行い、事前のアクティブラーニングを促した。
228	講義時には、視覚教材だけでなく、実際の器具や器械などを用いて学生がイメージできるように工夫した。
229	講義時には、学生が受動的にならないように発問をし、学生が能動的に取り組めるようにした。
230	演習から実習に繋げられるように、また実習から学内の講義・演習に振り返りできるように学生に想起させた。
231	講義内容や演習方法について、上司らと相談しながら、より学習目標の達成に効果的なようにいくつかの科目で方法を改善した。
232	老年看護学概論において、ルーブリック評価を取り入れ、到達すべき学習項目と到達度を課題を提示する際に説明し、レポートの評価項目と到達度について学生と教員の共通理解に努め、さらに学生自身の自己評価に活用した。
233	老年看護学援助論では、次年度の新カリキュラムに向けて、教育内容を見直した。具体的には、看護過程での事例の対象理解を深めることを目的にロールプレイを取り入れ、かつ、事例を3年時の科目と連動して展開できるように工夫した。
234	看護倫理講義に事例検討グループ学習の事例をより臨床に即したものに変更し、臨床に即した倫理的課題の解決方法を習得できるようにした。
235	今年度は討議・発表時間を1コマ増やし、学習の共有による効果を高めた。
236	長寿と健康では、昨年度、学習効果がみられた認知機能評価演習（ロールプレイ）のコマ数を増やし、グループ討議による思考力の向上や発表・質疑応答を通して学習の共有による効果を高めた。
237	老年看護学援助論では、生活機能障害を持つ高齢者の心理を理解することを目的にロールプレイを用いてコミュニケーション演習を行った。コミュニケーション場面のための計画立案からリフレクションを行い学習を深めた。
238	講義はパワーポイントや動画などの資料を用いて行った。
239	事例を用いた演習では、個別指導およびグループ指導を行い、実習等で看護実践に繋がるようにした。
240	母性看護学援助論、発達看護演習Ⅱ、母性看護学実習のなかで、KPTAを導入し、3科目の関連性、継続性を意識させた
241	助産ではバイオメカニックスの原理を活用した教育で、分娩介助技術の習得が例年に比べ進んだ
242	講義では見たり、触ったりすることで授業内容の理解が深まるように、シミュレーターモデルや機材、記録用紙を用いた。結果、学生からはわかりやすいという評価であった。
243	演習においてアクティブ・ラーニングの一つであるジグソー学習法を導入し、授業を工夫している。
244	演習では、アクティブラーニングの一つであるジグソー学習法を取り入れ、学生が互いに教え合いながら学べるように設定した。グループ間で、コミュニケーションを図りながら実践するため、協調性やリーダーシップ等の社会人基礎力向上にも繋がるのではないかと考える。

245	講義ではスライドをシラバスにして配った。実際の症例の画像を用いて、理解しやすいように提示した。
246	講義においては、専門用語と平易な言葉を並行して使用することで、より理解が深まるよう心がけた。
247	講義スライドを学生のレベルを検討しながら、内容の改善をおこなった。
248	学生に対する指導では、学生たちの疑問に根気強く対応した。
249	実臨床に基づいた症例提示、経験談を中心に教科書的な知識と現在のガイドラインに照らし合わせ講義・説明を行った。
250	選択コースでは、外傷初期診療を徹底して指導し、研修医になったときに役立てられるように教育した。
251	分かりやすい内容に変更
252	講義においては、BLS講義では単にやり方の説明を行うのではなく、医学生としてBLSを学ぶことの意味合いも伝えるようにした。
253	麻酔では、術前からの患者リスクの指導、術中は患者管理に加え基礎医学領域の知識が臨床にどのように生かされているか、医学生として学習すべきことを理解するよう説明している。
254	救急では、さまざまな臨床領域の問題が複合して生じていることも多く、それを診断から集中治療につなげ、一連の流れになるよう説明している。
255	講義においては実践的で興味が持ちやすい内容をテーマとした。
256	医療プロフェッショナリズムの講義においては、ワークショップ形式を採用し、学生が主体的に考える形式をとった。
257	クリニカルエクスポージャーではコミュニケーションスキルの重要性について説明を行い、面接後にも振り返りを行うことで各自何が問題であったかなどについて、学生と討論を行った。
258	学生講義ではPowerPointでのスライドで写真を多用し、インパクトの強い、印象に残る授業を心掛けた。
259	OSCE・文化教育学部のBLSの講義では、自ら実践しながら詳細を説明し、可能な限り一人ずつ良い点・悪い点を指摘した。
260	リハビリテーション医療の幅広い領域と内容について理解や興味を深めてもらうために具体的でわかりやすい説明の工夫を行った。
261	過去の症例をもとにリアリティのある症例呈示に努めた。
262	リハに関する講義ではロボットリハやがんリハなどの取り組みも紹介した。
263	チーム医療においては、計画性、相手に対する共感や敬意、感謝の心などが重要であることを説いた。
264	講義内容を絞り、図表や写真を使ってわかりやすく説明した。
265	医薬品の薬理作用を系統別に独自にまとめた最新の表を資料として配布し、学生の理解を容易にした。
266	退屈させない工夫として、演習を用いた参加型の講義を行った
267	退屈させない工夫として、実際の臨床薬剤の調剤などを行う参加型の講義を行った
268	学生が知りたいこと、興味がわくところ、国家試験でもよく出題される重要なところ、最新の知見に関することなどを中心に授業や講義、指導を行うことを心掛けた。

【専門教育科目・実習】

1	前年度までの実習においてどの手順で学生の質問や失敗が多いか、またその失敗の内容を参考にして説明改善している。
2	実習中、学生が困ることなく実験を終えるように、巡回を頻繁に行った。
3	大学院生も含めて配置してきめ細かい指導を行い高い評価を得た。
4	実習レポートの書き方について、細やかな指導を行った。
5	昨年度の課題を基に、実習・PBLともに指導方法の改善・工夫を行うことが出来た。
6	レポートにおいて過去のレポートの写しを提出した場合に判別できるように実習を工夫し、写しを提出した学生には再提出と指導を行った。
7	実習では、新規に設定したテーマをさらに改良し、安定した結果が出るように工夫した。また、最新の分子生物学的手法やゲノム情報に関する内容を盛り込み学生の興味を引くようにした。
8	実習に関しては、昨年レポートで多かった間違いや勘違い点を踏まえて、実習書を改善し、実習中にも補足説明するようにした。
9	免疫学実習では、すべての学生が参加できるよう、実験操作が特定の学生に偏らないように配慮しました。また、興味と関心を持ってもらうために、クイズやディスカッションを交えながら行いました。
10	組織学実習では、1年次の分子細胞生物学の成績を参考にし、バランスの良い実習班をつくることにより班単位での自己学習を推進させた。毎回スケッチ評価および可能な限り面接を行い、学生に対する指導が十分に行えるよう心がけた。
11	組織学実習において、組織・細胞の構造や構成に関する誤った認識は実習の場で指摘し理解を促した。

12	組織学実習において、スケッチの提出レポートには問題点を示したコメントを付記してフィードバックした。
13	神経解剖実習において、脳神経系の構造や構成に関する誤った認識は実習の場で指摘し理解を促した
14	神経解剖実習において、立体的構造また部位ごとの質感の違い、その成り立ちについて説明し理解を促した
15	組織学実習において、スケッチの提出レポートには問題点を示したコメントを付記してフィードバックした。
16	解剖実習・骨学実習において、希望する学生に対して解剖手技についてのレクチャーを行った。
17	19時頃まで学生の実習指導を行っている。
18	実習中のスケッチや口頭試問において、理解が遅れている学生は進んだ学生に先ず相談し問題解決を図るように、また、教える側も誰かに説明することでより理解が定着するという互助精神に基づいたグループワークを行うよう指導した。中には自尊心の高い学生もあり、同級生から教わることを敬遠したり、あるいは自分が学んだことを易々と教えまいとする者もいたが、そのような考えでは将来的に患者さんから話を聞き出せない、もしくは患者情報を医療人同士で共有しないことにも繋がりがかねず、本人のみならず、患者さんにも不利益が生じる可能性を個別に話し、班学習への参加意欲を喚起した。
19	実習中には常にそばで指導を行い、実習における各操作の意義を学生が理解できるように心掛けた。
20	わかりやすい実習を、極端な小人数で行えるよう、実習内容と実習器材に工夫を凝らした。これは「佐賀大学の取り組み」に掲載された。
21	高い実習品質を維持するため、講義アンケートを毎回おこない、その結果を即時にフィードバックした。
22	実習内容の理解を徹底するため、実習の各ステップごとにPBL形式のディスカッションを行った。
23	自己学習を促進するため、実習書やディスカッション資料はカラー印刷し、専用のウェブページ(学内限定)でPDFファイルを配布した。
24	学生の理解をふかめるため、学生からの質問には十分な時間を割いて、可能な限り丁寧に回答した。
25	薬理学実習において、自律神経系刺激による消化管運動の変化を観察させた。様々な阻害薬の投与によって生じる消化管運動の変化をを学生自らが考察するよう指導し、学生の論理的思考力の育成をおこなった。
26	実習では、一人一人が実習に参加できるように心がけた。
27	昨年度から実習用の画像、症例等を再検討した。
28	講義・実習では、分かりやすい説明を心がけ、学生の質疑等に対し、丁寧に対応、指導した。
29	実習も時間外の実習を行った。
30	実習と講義をリンクさせ、効果的な理解を図った。
31	実習では、なるべく多くの学生の質問に答えられるよう気を配った。
32	微生物学実習では、実習内容を説明する冊子の改善を毎年おこなっている。
33	実習のまとめ、ディスカッションに時間を費やし理解を促した
34	実習の参考資料を充実させ課題への興味を促した
35	実習では、実施中に巡視して指導し、終了後にはレポートを点検し指導した。
36	実習に関しては、関連文献等を提供し、データのまとめ方、発表デザインについてこまかく指導した。
37	病棟実習ではPBLスタイルのレクチャーを始めた。
38	外来実習ではできるだけ実際の患者さんの所見を観てもらおうように努めた。
39	画像診断を実習に取り入れ視覚的に膠原病リウマチを理解できるように工夫した。
40	医学科5年生病棟臨床実習において呼吸音の正常、異常についての講義、胸部X線読影の講義を行い、呼吸器学の基礎について学生指導した。また、カンファレンスや回診で学生の指導に当たった。
41	毎週月曜日新患外来にて病歴聴取、胸部X線、CT読影の指導を行った。
42	気管支鏡検査の見学では、画像所見から検査の必要性、目的、注意すべき合併症などを把握させてから行っている。
43	医学科5年生の臨床実習において、2~3人の小グループでのベッドサイド診療の教育を行うようにした。
44	病歴、症状や検査所見から診断に結び付ける考え方を身につけられるよう心がけた。
45	臨床実習に関しては、学生担当患者の診察法、カルテ記載法、症例提示に関して個別に指導を行い、脳卒中に関しては学生グループ毎に講義を行った。
46	病棟実習では、可能な限り、実際の患者さんをモデルに診察実演をするようにした。
47	病棟実習において、脳卒中診察 (NIHSS) のWEBビデオ上のテストを行い、全員に合格認定証を受け取るようにした。
48	本年度より、終日1学生をマンツーマンで指導する体制へ変更し、外来及び、入院患者に対する診察、検査、病状説明等スチューデントドクターとして、副主治医の立場で指導を実施した。

49	個別に、朝30分、夕30分は対面指導を実施した。
50	臨床実習においては、実習が円滑に進むようマニュアルの作成など体制の整備に努めた。
51	5年生の臨床実習における心エコーレクチャーは、卒後研修センターにおいて、学生全員にお互いに実際のエコーを使用させ、時間をかけて丁寧に説明するように心がけている。
52	専門外来で、新患患者の問診、診察を行わせ、診断までのプロセスを自分で考えて導き出せるような指導に努めた。
53	ミニレクチャー・手技/外来見学などの循環器臨床実習の枠組み作成を行った。
54	外来実習は単なる見学でなく、1症例のみ立ち合い、自らが診察した気分で診断させる形式とした。
55	臨床実習中でも押さえておきたい腎病理所見の基礎と実臨床での例を提示し理解の助けになるよう取り組んだ。
56	臨床実習では多様な症例を経験できるように担当患者を振り分けた。
57	実習時にはグループ毎に効果的な診察の流れを理解するために、分担（学生ごとに）を分け、立場を交代して行うことで理解を深めるように工夫を行った。
58	調べる・考える姿勢をつけるように、指導を行った。
59	病棟実習は糖尿病・内分泌の疾患を教えるだけでなく、POSを用いて症候学・鑑別診断を主体に指導した。
60	外来実習の中で問診のととり方、糖尿病の治療についても患者を通して指導した。
61	病棟実習では、糖尿病合併症の知識や治療目標に関する基本的な内容を学べる講義を行った。
62	外来実習では患者個人に応じた治療目標の設定や治療薬の選択に関して、実際の診療に即して指導を行った。
63	社会医学の実習においては、教科書に記載されていないウイルス性肝炎の最新治療についての講義を行い、臨床医学と社会医学の橋渡しとなるような講義内容とした。また、佐賀県健康増進課に実習の一部を依頼し、学外の関係者と共同で取り組んでいることを講義していただいた。
64	病棟実習では、患者のつけかえや診療を通じて、疾患や治療に関して教育を行った。
65	医療の現場で働く上での常識やコミュニケーションスキルを教えた。
66	外来実習は、それぞれの疾患において医師が医学的/社会的などの目線で、何を考えながら診療しているかを説明しながら行った。
67	病棟処置では見学のみならず積極的に体を動かさせた。
68	実習では、学生に実際の臨床ではどのような点が重要なのか、また何が分かっているのか、を理解させながら指導することを心掛け、また実習でしかできない手技などについても積極的にその機会を与えた。
69	心臓手術において、どのような方法で心臓を停止させるかを手術場で指導するのみならず、生理学的な教育を施した。
70	心臓血管外科学のみならず、医師として基本的なスキルである、触診や聴診、エコー所見の理解の必要性などを感じてもらえるような伝え方を意識した。
71	研究室実習
72	臨床実習では、実際に糸結びをおこなってもらったり、手術前後の時間に手術用顕微鏡を動かしてもらったり、できるだけ体験することで、難しさや面白さを感じてもらえるようにしている。
73	受け持ち患者に関係する英文論文を読ませ、周辺知識を習得させる。
74	手術実習において、術野モニター供覧し、on time discussionを取り入れた
75	臨床実習では、学生が担当症例の理解を深める為、周辺知識も含めてレクチャーを行った。
76	手術解説に関しては、マンツーマン指導を徹底し、単なる見学にしないよう工夫している
77	臨床実習では、手術見学の学生が退屈しないように、手術の進行状況、術野の解剖を、リアルタイムで説明した。
78	ただ教えるだけでなく、質問を織り交ぜ、学生の考える力を養い泌尿器科学により興味関心がわくように努めた。
79	レクチャーでは模型やモニターや実際の機器を用い、実際の手技を通して、知識と手技の融合を図った。
80	オリエンテーション用のDVDや資料を作成し、臨床実習の導入がスムーズに進むようにした。
81	学生の実習等特に努力した。
82	実習では、各々の担当ケースに照らし合わせながら指導をすることで体験に基づく学習になるように指導すると同時に、精神医療の現場で実習生が傷つくことなく安全に実習に取り組めるように配慮した。
83	実習においては、2年後に医師になるものと学生を患者に紹介し、学生にも自覚を持ってもらうとともに、患者にも安心感を与える工夫をとった。
84	実習におけるミニレクチャーでは、学生が積極的に参加できるよう双方向の講義を心掛けた
85	実際の多職種とのかかわりを通し、チーム医療の重要性などを気づかせていけるよう取り組んでいる。

86	論理的思考を促す目的で、臨床実習の講義では対話形式で行うようにした。
87	病棟では小児ならではの特性に興味をもってもらえる様に指導した
88	臨床実習については、実際に休日夜間診療所に来た患者を例に挙げて指導。
89	実習では、各症例について、より深く教育を行うとともにベッドサイドでしか学べないことに重点を置いた教育・指導を行うようにしている。
90	家族説明だけでなく、コンサルトや他職種との話し合い、いろいろな場面に連れて行き、退院後の患者の生活に目を向ける大切さについて指導した
91	外来の見学では、患者毎に教科書で内容を確認してもらった。特にホルモン関連は知識の混乱が見られたため図表を用いて指導した。
92	医療現場の安全対策について臨床実習で講義を行なった
93	実習では、専門的な内容を分かりやすく説明した。質問に対して丁寧に解説した。
94	臨床実習では豚眼を用いた手術実習に関して、5年生全員に実際の手術を体験させた。
95	実習で来た学生には一方的な知識の説明ではなく、症例に関連する重要な知識を質問形式にして説明した。
96	PowerPointを用いた臨床実習の学習資料内容の充実を行った。
97	臨床実習においては、外来診察を中心に、問診の聴取や実際の診察を指導した。
98	学生を積極的に手術助手として参加させた。
99	外来で模型や図表、実際の超音波検査を呈示しながら指導を行った。
100	6年次選択実習において、副鼻腔実態モデル・骨標本・内視鏡を用いて指導を行った。
101	同実習においてOBが院長であるクリニックでの見学実習を取り入れた。
102	臨床実習では、問診から聴覚検査、説明までの流れの見学してもらい、初診から診断までを見学・体験してもらっている。
103	実際の気管カニューレや鼓膜ドレーンを手にとって、手技やカニューレの使い方、使い分けについての学習も行った。
104	学生が手術助手として参加出来る手術には積極的に参加させた。
105	医学科の学生が臨床実習を通じて歯科口腔外科領域の病態や治療法の特徴について理解できるように資料を作成して説明を行った。
106	講義資料を使い、理解を助けるよう工夫した。
107	ペイン外来での実習時には各種模型や教科書を使ってブロックの手技を分かりやすく説明した。痛みという個々の体験を扱う診療科としての難しさや面白さを伝えるようにした。
108	実習の指導は講義スライドを新しいものに作り替え使用した。
109	できるだけ多くの学生と長い時間接するように努め、個々の学生の到達度に合わせた指導を行った。
110	統括試験用の画像問題は新しいものに変更した。
111	実習での講義に国試の問題も取り入れている
112	実習中の放射線検査時の手技をなるべく行わせている
113	実習では、積極的に学生に話しかけ教育した。
114	臨床実習においてマンツーマンで指導した。
115	CT室の見学時に、造影剤問診事項の重要性を解説することで、将来医師として働く際に主治医として行うべきことの重要性を認識してもらうようにした。
116	実習時のレクチャーにおいても、正常像を深く理解することを主眼に、病変の発見につながるアドバイスを行うよう努めた。
117	臨床実習では、PBL形式授業とReverse CPCを行っている。
118	知識習得のチェックとしてe-learning用テスト形式を実施。
119	輸血学については教育用DVDを用いて実習を行っている。
120	実習内の講義であるため、実習中の感想などを聞くことから講義をはじめ、一方的にならないように講義している。
121	できる限り最新の情報を加え資料を作成した。
122	研究室実習では、かねてよりロードマップを策定し、目標とテーマを設定した。その後に、実際のデータ収集と統計解析の進め方について、実際にソフトを操作しながら進めている。
123	EMPの講義は顎駅番号順に着席させるようにしている。
124	EMPは毎回小テストを施行し、学生をコンスタントに医学英語に曝露するように工夫している。
125	6年次感染症実習において感染症や抗菌薬、感染対策に関する基礎的講義を行うとともに、診療を通じた臨床現場で活用可能な知識獲得を目標としている。
126	6年次の感染症実習では学生の自主性を尊重し、積極的に臨床判断を行うことを促すとともに実際の診療に同行させた。
127	実習では、新たな福祉機器を増やし、説明文書と解説方法を改善した。

128	実習において、医学部内実験室での実習のほか、農学部アグリセンターでのフィールド実習を取り入れ、ICT利活用の基本を体験させている
129	担当科目の教科主任として、学習要項作成、実習連絡会議資料、評価資料等を作成し教員ならびに実習指導者の調整を行った。実習が円滑にいくように事前準備を整え実習指導を行った。
130	臨地実習において、実習指導者との教育内容についての事前打ち合わせ、および学生個々の指導についての話し合いを持ち実習が効果的に行われるよう調整を行った。
131	臨地実習指導において、学生の日々の学習状況を確認しながら、個別指導を行った。
132	実習においては、昨年度の課題を踏まえ、実習前から学生の学習状況を確認し、課題を明確にして臨んだ。
133	実習中は、毎日記録物を確認しコメントを記載し、学生が次の日に修正して実習に臨めるようにした。
134	必要時は、時間外に指導時間を設け、個別指導を行った。
135	実習中の技術の経験を期限を決めて確認し、実習指導者と調整しできるだけ学生が経験できるようにした。
136	カンファレンスでは、学生だけでなく、実習指導者とも内容の調整し、学びの多いカンファレンスになるようにした。
137	精神看護学領域の教員と実習指導者との連携は常に念頭に置き、学生の臨地実習が円滑に行えるよう取り組んだ。
138	精神看護学実習では、実習開始前に学生へのオリエンテーションやガイダンスの作成、看護部及び実習指導者と事前に打ち合わせや確認を行いながら必要物品を整備し、学生が円滑に実習が行えるように取り組んだ。
139	統合実習参加者に、ドクターヘリでの研修を経験させた。
140	看護英会話能力の向上を目指した教育を統合実習に盛り込んだ。
141	成人看護実習では、学生の目標を達成するために急性期実習におけるスケジュールの調整を行った。
142	実習においては、実習の進行状況と学生個々の能力・学習準備状況を考慮し、個別的な対応・指導が行えるよう努めた。
143	実習中の学生の体調管理だけでなく心理状況についてもフォローができるよう、必要時は病棟側のスタッフ・保健管理センタースタッフと連携をとって関わった。
144	統合実習では、学生が学びを深めたいと考えた理論を用いた事例の展開の仕方に関する学習会を設けた。
145	成人看護実習では、学生のアセスメントに対する指導を強化するために、根拠を常に考えさせた。
146	実習では、学生の思考過程と看護技術のスキル向上のため、臨床実習指導者との調整を行った。
147	上司や他の教員らと相談しながら、成人看護実習に向けた学生の準備として、看護技術プラクティス(夏季セミナー)の方法や実習前の事前学習の提示方法を変え、実習に向けた効果的な学習ができるように改善した。
148	老年看護実習では、実習2日目にミニカンファレンスを取り入れ、対象理解のスキルアップを図った。
149	全ての実習終了後に臨地実習指導者への実習報告会を開催し、隣地実習指導者と教員との相互理解を深める機会を設けた。
150	老年看護実習では、対象理解や問題解決する力を高めるために臨地でのカンファレンスの機会を増やした。
151	老年看護実習・地域看護実習において、スムーズに実習が行えるよう臨地実習指導者およびスタッフと相談をしながら調整を図った。全員が実習目標を到達できるよう、個人およびグループに指導を行った。
152	母性看護学実習では、実習目標の見直しを行うとともに、指導者との間の共通認識を高め、学生の満足度の向上に繋がった
153	学生と教員の実習目標の共通認識が深まるように、実習ルーブリックを試行した。学生からは、目標が具体化されているという意見があり、特に使いづらいという意見はなかった。
154	NICUの記録用紙を変更することで、ケアを変更する理由やケアのポイントについて理解が深まった。
155	母性看護実習において、目標達成のための学習準備と行動分析のKPTAを活用し、学生の実習目標達成度を具体的に評価した。
156	小児看護実習では健康な子どもを理解するために保育所実習を1日夏休み期間に実施した。夏休みに行った理由として、附属病院の子どもセンターの実習対象となる子ども達が易感染状態であることから保育園実習で感染症の媒体とならないように配慮したためである。健康な子どもの発達を理解した上での病棟実習であるため発達支援について深く学ぶことができたものと思われる。
157	実習では、病院実習と今年度から保育所実習も追加した。保育所実習では、遊びや発達段階に応じた子どもの生活や保育士の関わり方を見学・実践し、発達支援について学ぶことができた。その後、病棟へ行く事で、入院の影響や疾患のある患児の発達が理解しやすく、発達支援の実践にも活かされたと考える。

158	麻酔シュミレーターや、薬物血中濃度シュミレーターなどを活用した
159	集中治療部における学生実習について、医療機器のモデルや実機などを活用した
160	実習では実際の症例のCT、MRI画像を用いて、正常画像解剖、異常所見、レポート作成のポイントをわかりやすく解説した。
161	実習においては、医局内の若手スタッフと研修医、学生と一緒に取り組めるように朝のミーティングで誘導した。
162	実習時、全員にN. Engl. J. Medなどの英文誌を読ませ、まとめを作らせた上で発表させた。
163	実習では参加型移行を主導し、学生に回診で直接指導する形式を新たに採用した。
164	学生実習では、外来指導時は実際の患者問診を行わせる。問診内容で足りないところを指導しながら、鑑別疾患を上げ身体診察、必要な検査の選択などの診断過程を見せながら指導を行った。
165	学生カンファでは午前中に受診した患者を題材にPBL方式で問診した学生を患者役とし、学生内で問診、鑑別疾患、実必要な身体所見・検査などを討論させ、外来診療を模擬的に行わせた。
166	臨床実習では、総合外来初診患者の問診・診療を通じて外来診療の技術を習得させることを目標とする。研修医では、入院患者に対する診療を軸とし、日中・夜間救急外来も含めて研修指導を行う。ウォークイン患者であっても重篤な疾患を持って受診する患者もおり、これらをスクリーニングするための問診・診察・検査を適切に行えるようになることを目標とする
167	病棟実習で毎日朝夕に学生とともに回診を行い、その際にその症例に沿った質問・ワンポイントなどの説明を日々行う
168	臨床実習、PBLでは、学生自身による考察を深められるよう、粘り強く対応した。
169	6年生の病理部実習では、医療安全の講義や病理診断実習など、卒後の臨床研修で役立つ内容を盛り込んだ。
170	レポート課題の見直しを行い、学生が自主的に取り組める内容とした。
171	病理学、UNITの実習には、学生からの質問に熱意をもって対応した。
172	臨床実習においては、ただの業務見学にならぬように、常に学生に質問をし、回答を促すようにしている。
173	内視鏡検査・治療は事前に概要を説明してから行い、学生の理解に協力した。
174	6年生のリハ選択実習では、現場での診察・リハビリ訓練を重視した。脳画像もともに議論した。
175	薬剤部での臨床実習では、地域包括ケアシステムや多職種による医療連携の必要性について分かりやすく説明した。
176	Audience response System (ARS) を用いた心電図教育法を取り入れるなど指導法の工夫を取り入れている
177	PBLチューターに際しては学生の討論・考察を引き出すために必要と思われる介入を積極的に行うよう努めた
178	臨床病棟実習では、多くの臨床所見を見学し、学生が体験できるように配慮した
179	臨床外来実習では、個々の外来症例ごとに、症例のフィードバックを行った
180	超音波検査の見学時に実際の画像を使用し見方を説明した

【PBL・TBL】

1	課題の内容についてのチューター用資料を読んで、自分が知らないこと理解が困難と感じた点について学生に教えてもらうつもりで多くの質問をしている。
2	PBLチューターに関しては、奨励の内容にとどまらず、物の考え方などを伝えるようにしており、アンケートを見る限り高い評価を得ている。
3	PBLに関しては、発現内容の信頼性を都度全員で考察するように指導した。
4	PBLでは、学生の意見に傾聴し、たくさんの考えを引き出すことができました。
5	PBLでは、これまでの経験を基にして説明や質問の回数を増やした。
6	PBLにおいては、質疑応答に積極的に取り組むよう指導した。
7	PBLにおいては、患者の立場、医療者の立場をより実践的な立場から慮るよう働きかけた。
8	学生の修得度合いを考慮しながら、指導を行い、それぞれの位置から目指すべき像を考え、言語化を働きかけた。
9	課題に答えることがどういうことなのか、聞かれたことを答える面白さや難しさを認識させた。
10	限られた時間でいかに伝えるかの方法、例えば用いる言葉やプレゼンテーションなどを相互で評価させ、認識を促した。
11	PBLでは、学生が発表しやすいように気を配り、特にプレゼンについてそれぞれの学生が興味を持った事項を他の学生にも伝えるように指導した。
12	PBLでは学生間の議論が何となく終わってしまうのを防ぐため、解剖学・生理学の復習事項やCBT・国試で問われる重要事項に関して必ず学生に質問し考えさせ、納得して次のステップへ進めるよう配慮した。
13	PBLでは、学生全員が討論に参加するように促し、討論が活発に行えるようにした。

14	PBLでは質問やコメント、フィードバックを積極的に行い、また独自に補足資料（ガイドライン等）を学生に配布し、議論の活性化や学習意欲の向上を図った。
15	PBLでは十分な準備をして学生の質問に答えることができるようにした。
16	PBLチューターとしては、議論を円滑に進行できるよう、質問や適切な助言をした。
17	PBLチューターでは、実際の学会発表などのやり方を指導した
18	PBLでは、科学的な疑問点を指摘することで、科学としての医学を実践させた。
19	PBLでは社会医学関連のシナリオ改訂に助力し、特に疫学研究の実際と統計解析について理解が深まる様に配慮した。
20	社会医学の疫学のPBLシナリオを新たに作成した。インフルエンザワクチンの有効性評価についての疫学の方法論を学ぶと同時に、男女共同参画についての理解を深められるような工夫をした。
21	PBLでは、学生が発言しやすいように和やかな雰囲気づくりに努めた。
22	PBLシナリオを作成した
23	PBLチューターとして、学生が発言しやすい雰囲気づくり、適切な疑問の投げかけなどに取り組んだ
24	PBLシナリオは四年目となり、小さな改訂を加え、総講義では検案書の書き方についても言及した。
25	PBLは班によって議論への積極性が異なるので、介入の仕方を毎回変えた。
26	TBLでは事前に講義を行い学生のディスカッションの基本となるように工夫し、TBL後の講義で質問事項について解説を行い理解を深めることができるように工夫した。
27	PBLチューターでは、シナリオを生の実験のような生き生きとした像を学生の頭に描かせられるように介入を行った。
28	PBLでは単一の病態でよいのか、複数の病態が重なっているのかなど考えた上で鑑別を上げていくように指導した。
29	TBL講義では臨床に即した内容や最新のデータによる講義を行った。
30	学生自身の言葉でのプレゼンテーションを引き出すことを心がける
31	PBLでは実際の患者のエピソードを紹介
32	講義のビジュアル化に務めたことと、プリントを併用しつつスライドをより洗練させたことで、PBL講義の学生の評価が最も高い講義の1つとなった。
33	PBLチューター時にミニレクチャーを加えた。
34	CBLのシナリオはこれまでのTBLをそのまま用いず、設問をともに常に改変して新鮮さを維持した。
35	PBLチューターとして、学生発表に対する補足を適宜行った。
36	学生の理解が深まるようなPBLのシナリオを作成した。また、教官用のチューターガイドを作成した。
37	今年度からCBLに変更となり、集中的に診断学を症例を通して教え、学生の自己学習能力を引き出した。
38	PBLでは、理解が深まるよう適時介入した。
39	CBLでは、グループでの討議を促進するような症例作成を心掛けた。
40	CBL用の課題を作成した。
41	ユニット7のCBLでは実際の診療の流れに沿って症例を提示し、皮膚および病理所見の見方、鑑別、検査方法、治療選択についてグループディスカッションを行った。
42	PBLでは、前年同様に、学生の討論に積極的に介入し、症例の検討の方向性を正しく誘導できるよう心掛けた。また、症例に合わせた実臨床の場での経験を紹介し、検討している症例をイメージしやすいように努めた。
43	TBLで実際の診療に基づき症例提示を行い、学生に実際の診療に近い考え方を教えた。
44	3年生PBLにて、臨床に即して開設した。
45	各ケースに対する理解が深まるように、ディスカッションを促し、時に疑問を投げかけるようにした。
46	PBLチューターとして一人一人に質問を行い、どこまで理解できているか、どこが理解できていないのかを確認し、学習のポイントを確認した。
47	PBLチューターに関しては、グループ・メンタリティを尊重することで自主的に課題に取り組めるように配慮した。
48	PBLにおいては、自己紹介に時間をかけて場の雰囲気を和らげ、発言内容の正誤に関係なく積極的に発言することを評価することを伝え、活発な議論を導いた。
49	PBLチューターでは学生の議論を引き出す様に声掛けや問いかけを心掛けた
50	PBL講義は学生が興味を持てるように、臨床に即した内容となるように工夫した。
51	PBLでは、疑問点として挙がった事柄を、臨床的にどのように重要かを説明して、ふたたび議論させた。

52	PBLチューターとしては、個々の学生との距離が近いので、なるべく個々の学生の個性を見出しつつ、方向修正や適切な付け加えを適宜おこなっている。
53	学生が発言しやすいよう雰囲気作りに配慮した。
54	悩んでいる様子であれば疑問点を確認し、解決する方法を促した。
55	PBLにおける学習要項作成、シナリオ作成
56	PBLにおいて学生の自主的な意見交換と自己学習を支援した。
57	PBLでは、チューターノートを参考に活発な話し合いができるよう心がけた。
58	PBLのシナリオに沿って実臨床を想定した質問を投げかけ、シナリオにリアリティを持たせた。そのことによって、よりシナリオに具体性を持った疑問、答え、Learning Issueを挙げさせることができた。
59	PBLではチューターとして意欲的に学生が意見を出せる様な環境作りに努めた。
60	自分の臨床経験を踏まえ、疑問に思った事など、例に挙げながら、積極的に学生のディスカッションの中に問いかけるようにした。
61	TBLにおいてモニターやDVDをデモンストレーションして臨床教育の動機づけを工夫した。
62	TBLの応用課題には画像（写真）を多く取り入れた
63	PBLではなるべく学生に質問を投げかけ、考えるよう促した。
64	PhaseIII検討部会、unit2コチエアー、シナリオ作成、問題作成に参加しPBL教育の改善に当初から取り組んでいる。
65	PBLシナリオに画像を取り入れ、画像読影実習をおこない4.7という高い評価を得ている
66	PBLでは、極力介入するように努め、積極的な意見の交換を促した。参考資料の作成・提示も行った。
67	PBLでは学生の主体性にまかせて要点だけを指導するように心がけた
68	TBL授業の工夫
69	PBLチューターでは、教科書の丸写しにならないように、学生なりに臨床現場を想定してもらい進めていった。
70	PBLでは、指導書の着眼点を予習し、伝達すべき要点を端的に伝達するように努めた。
71	PBLチューターとしては、学生の担当する部分に加え、その中で不足している項目についての実践例をあげながら指導を行っている。
72	プレゼンテーションの手法や文献引用の方法や著作権の取り扱いを具体的に示している。
73	PhaseⅢチェアマンとして検討部会を定期的に開催し、PBLの問題点の把握と解決につとめた。
74	PhaseⅢでのCBL運営のため、ガイドを作成し教材作成を支援した。
75	PBLにおいて受動的になりがちな学生に対して、過度な誘導にならないように配慮しながらディスカッションが盛り上がるよう、指導した。
76	PBLチューターとしては学生達が自ら発言しやすい雰囲気作りに努め、臨床でも役立つ内容も付け加え、興味を持てるように配慮した。
77	PBLチューターでは、学生の学習に積極的に介入するようにした。
78	PBLチューター時の指導は臨床現場の症例に照らし合わせ、より実践的に指導を行っている。
79	PBLにおいて課題となる症例に関する医薬品の資料を配布した。
80	PhaseⅢ検討部会世話人
81	PBLにて学生が発言しやすいような雰囲気づくりを行った

【その他・個別指導・マネージメント等】

1	医学科生、看護学科生4年生が 選んだ教員ベスト10（医学教育分野）で2位に選ばれた。
2	医学部代議員会において、医学部長賞（教育部門・医学教育分野）を受賞（医学教育分野において授業内容及び方法等について多くの学生から高い評価を受けた。）
3	Phase III試験問題、成績について解析を行い、担当教官に解析資料を配布した。
4	チューターとして、時間外でも相談に乗り、学生からの発言が聞きやすい様な環境で話し合った。
5	学生から試験の解答の質問に対して、教授室でわかりやすく説明した
6	留年生に特別に面談指導した。
7	大学院生教育においては、国際的にも比較的評価の高い Blood Cancer Journal（インパクトファクター 4.411）に原著論文が掲載された。
8	学界発表でも、国際学会では AACR、ASHIにて、国内学会でも日本癌学会にて学会報告をおこなった。
9	がん教育改革として、がんプロセミナーを佐賀大学として2回主催した。がんプロ履修者の満足度も高いものであった。
10	学生に対する進路指導を含めたレクチャーを追加した。

11	より高い専門性を求める知的好奇心が育成されるように国際学会への参加を年間3人、また国際共同研究ミーティングへの参加を3-6か月に一回の頻度で参加させる。
12	学生がなぜ佐賀大学での研修を希望しないか？という問いかけを行い、指導へのフィードバックとしている。
13	4年生にOSCE実習を初めて指導教官として授業を行った。
14	選択実習学生と夜に食事に行くなどと交流を持ち、学生の悩みなどに耳を傾ける機会を設けた。
15	全国学会発表
16	各ワークショップに参加し他教員の指導方針や教育方法に触れ、自身の教育方針にフィードバックできるよう心掛けている。
17	医学英語検定試験受験を推奨し、3級、4級合格を果たし学生がいる（Certificateを確認）
18	PhaseⅢの成績不振者に学習別面談、指導、補習を行った。
19	臨床実習後OSCE成績不振者にOSCEおよび医師国家試験準備の指導を行った。
20	チューターの指導では、進路に関する相談を受けるようにした。学生が進みたい進路を調べ、情報提供を行った。
21	附属病院の大規模災害対処訓練に看護学生を参加させて、効果的な災害看護教育を行った。
22	講義内容に触発された個別の求めに応じて面接を行なった。
23	演習や実習で目標到達が難しい学生については、教科主任などと相談の上、その他の時間で追加課題を課し指導を行った。
24	住民、NPOの協力を得て、住民参加型の教育（スキンケア教室、授乳相談、産後フォーラム）を行った
25	医学科1年生から6年生までの教育に際し、卒前・卒後教育（臨床研修、専門医研修）の切れ目ないつながりを意識し、常に、それらに関連付けて、学習者のモチベーションを高くするように心がけた。